

# 「コロナ禍における寺院」に関するアンケート調査

## ——その結果と分析——

三 浦 和 浩

### はじめに

令和4（2022）年9月の第59回法華宗教学研究會総会において、「コロナ禍における寺院」というテーマで討議會が行われた。今回報告するのは、本討議會において筆者が発表したアンケート結果とその分析である。

周知の通り、コロナ禍における2年間は、世界を一変させた。中でもインターネットの利用が進み、一般労働者のリモートワークから、世界各国の首脳會議に至るまで、そのあり方の変化は著しかったと言えよう。だがその一方で、孤独で不安な日々を送る人々も増加し、外出や旅行などが自由に出来ない状況が、社会全体に閉塞感を生み出したことは否めない。また、コロナ禍による社会の変化に加え、従来からある少子高齢化や過疎化の問題はむしろ加速しており、寺院を取り巻く環境は決して良いものとは言えないだろう。

こうした状況において、法華宗（本門流）の各寺院教會においても、それぞれに対応がなされたと考えられるが、個々の対応を話に聞くことはあっても、全体としての実態を知ることはできなかった。

そのような動機に基づき、法華宗（本門流）内の寺院、教會、および布教所に宛ててアンケート調査を行った。アンケート実施からすでに2年が経過し、コロナ禍も過去の話になりつつあるが、パンデミック時の記録として、改めてここで報告しておきたい。

### 1. パンデミックの経緯

現段階では新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）は「5類」に分類され、人々の日常生活はほぼコロナ前に戻っているが、その一方で、発生当時の状況やその後の経緯については、すでに記憶が薄れていることもあると思われる。そこで、アンケートの報告を行う前に、コロナ感染の経緯につい

て、ここにまとめておきたい。

### ■第1派

令和元（2019）年の12月、中華人民共和国湖北省武漢市において「原因不明肺炎」が初めて確認された。日本においては令和2（2020）年1月16日に神奈川県で国内初の感染者が確認され、2月3日にはコロナ感染者を乗せた豪華クルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」が横浜港に入港、2月13日には神奈川県内で国内初の死亡者が確認された。国民の危機意識は高まりを見せ、市中ではマスクや消毒液が不足。政府も対応を迫られる中、3月2日、安倍政権は全国の小中高校の一斉休校を開始。当宗においても興隆学林専門学校が予定されていた卒業式を取りやめ、一斉帰省させるなどの措置を講じた。また3月に開催を予定していた法華宗教学研究発表大会も中止を余儀なくされた。

政府は3月14日に「新型インフルエンザ等対策特別措置法」を改正しコロナをいわゆる「2類」に位置づけると、3月24日にはその年に予定されていた東京オリンピックの延期を決定。このような中で3月29日にタレントの志村けんさんがコロナ感染により死亡するなど、いわゆる「第1波」の広がりが可視化されていった。緊急事態宣言が4月に発出されたが5月末に解除され、一斉休校措置は終了した。

### ■第2派

しかし、6月下旬から再び感染が拡大（第2波）。20代～40代の若年層を中心に感染が広がった。全体の感染者数は第1波を上回ったが、重症者は少なく致死率も低下していたこともあり、緊急事態宣言は出されず、7月22日にはGo Toトラベルが開始され（東京を除く）、9月中旬には小康状態となり、9月下旬にはGo Toイートも始まった。興隆学林は前期は休校としていたが、この間にリモートの体制を整え、後期の期間中に年間のカリキュラムを消化することになった。しかし、9月開催予定であった法華宗教学研究の総会は開催できなかった。

### ■第3派

10月下旬に感染拡大の傾向が見られ（第3波）、12月26日には変異株が確認された。

年は明けて令和3（2021）年1月7日、1都3県に緊急事態宣言が出され（2月7日まで）、2月3日には「まん延防止等重点措置」を制定、2月17日にはファイザー製のワクチン接種が、医療従事者を対象に開始された。

#### ■第4派

続く3月にはまたも増加傾向となる中（第4派）、3月の法華宗教学研究発表大会は2年続けて中止となった。4月12日からは65才以上のワクチン接種が開始され、5月21日にはモデルナ、アストラゼネカ製のワクチンも薬事承認を受けた（この時点でのワクチン摂取率は4%）。

#### ■第5派

6月には一旦収束するも、インド起源の変異種「デルタ株」の日本流入により7月には増加傾向となった（第5派）。その中で延期されていた東京オリンピックは開催された（7月23日～8月8日）。感染拡大は8月下旬にピークアウトし、令和3年度の法華宗教学研究研究所の総会はリモートと対面を組み合わせたハイブリッド形式で開催された。

10月1日には「緊急事態宣言」と「まん延防止等重点措置」が解除され、10月下旬にはワクチンの2回目摂取率が70%に到達。12月上旬には感染者数が前年比10分の1にまで収束し、いよいよコロナも終わったかのような空気が流れた。

#### ■第6派

しかし、南アフリカで確認された「オミクロン株」の感染が国内でも見られるようになり、12月下旬にはオミクロン感染者が増加、令和4（2022）年1月から2月にかけてオミクロン株の感染が急拡大した（第6派）。法華宗教学研究発表大会は3年連続で開催できなかった。

#### ■第7波

第6派は3月にピークアウトし、7月上旬まで減少傾向が続いたが、7月中旬にまたもや増加傾向に転じた（第7波）。

#### ■第8派

その第7波も9月にはピークアウトを迎え、10月13日にファイザー製のオミクロン株対応ワクチンの接種も開始されて、いよいよ収束かと思われたが、11月上旬から増加の傾向が見られるようになり、令和5（2023）年1月上旬にピークを迎え、1月末には収束した（第8派）。

#### ■「5類」移行

そのような中、1月20日に政府はコロナの「5類」移行を検討する旨を発表。その後も感染は減少し、4月27日には「5月8日からの5類移行」が正式に決定した。

その後、今日に至るまで、マスクを外す人が増加するなど、平時を取り

戻したように見えるが、現在においてもコロナ感染は少なくないことが伝えられている。

## 2. アンケートの結果と分析

### §1. 調査の概要

#### ①調査対象

法華宗(本門流)の寺院、教会、布教所のうち、兼務寺院を除いた代表者

#### ②調査方法

郵送調査 記名は任意

#### ③調査期間

令和4年6月23日～8月31日

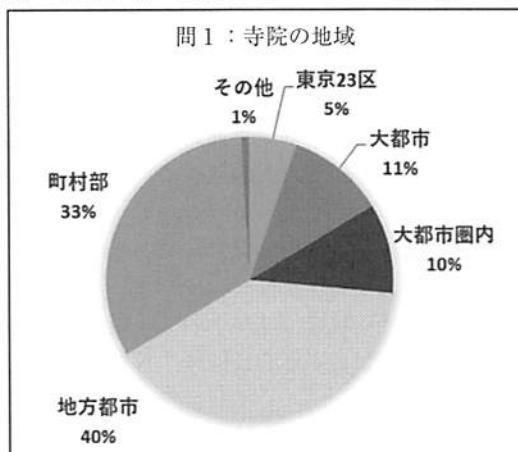
#### ④回答率

61.6%

### §2. 回答者の属性について（問1～問5）

#### 〔問1〕お寺の地域性をお答え下さい

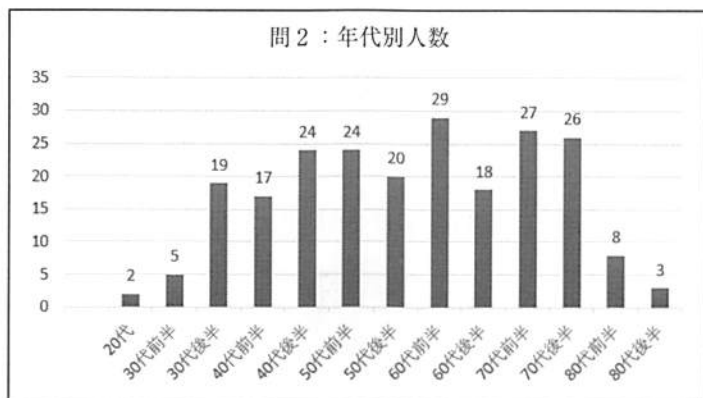
本アンケートを行うに当たり、まず最初に寺院の地域性について調査した。回答者の属性に偏りがある場合、それがアンケート結果にも繁栄される。例えばこの回答に依れば地方都市と町村部を合わせると全体の7割以上となるが、コロナへの警戒心や人口減少の問題が顕著に現れる地方都市の一部や町村部の割合が高い傾向にあることには留意すべきであろう。



## 〔問2〕性自認（性別）をお答え下さい。

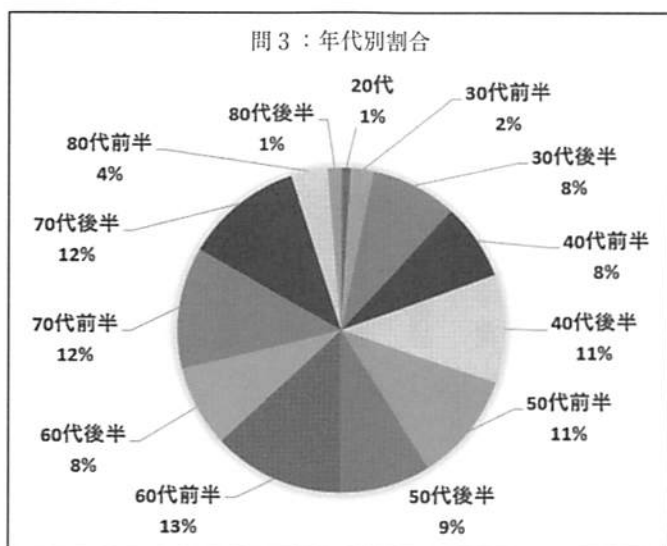
この問いに対する回答は、男性89%、女性9%、無回答が5%であった。

## 〔問3〕ご自身の年齢についてお答え下さい。



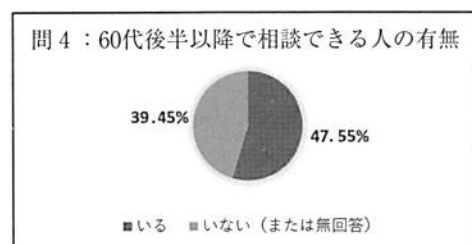
30代前半までの若年世代が少ないのは、住職という職務の特性上、ある意味で当然のことと言える。

円グラフからも分かるとおり、各年代がバランス良く構成されているの

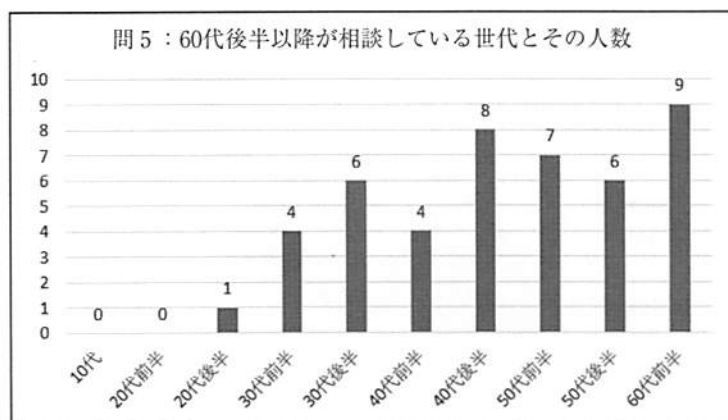


が特徴的である。約半数が60代以上という年齢構成は、住職という役割の性質上当然のことであるとも言える。また40代以下の世代が全体の30%を占めているのは、全体としては世代交代が順調に進んでいることの現れと見ることも出来るが、今回のアンケートに回答されなかった38.4%の人の年齢が反映されていないことには注意が必要である。

〔問4〕問3で60代後半以上とお答えになった方に質問です。寺院運営について常に相談している60代前半の方がおられますか。(例、ご寺族・檀家総代など)



〔問5〕問4で「いる」とお答えになった方に質問です。その方の年齢についてお答え下さい。



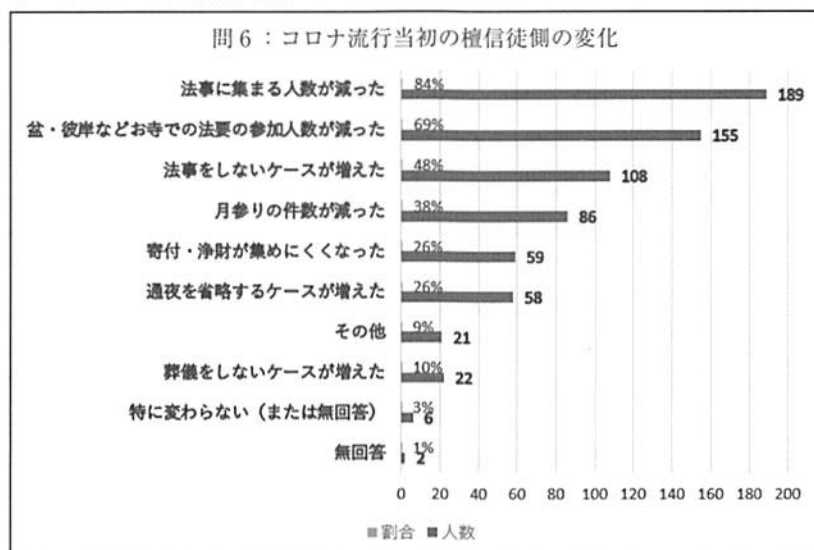
問4・問5は、いわゆる高齢者の定義である65才以上の方が、寺院運営についてそれ以下の年代の方に相談しているかを問う質問で、半数以上

(55%) が相談する人がいると回答している。相談相手の世代は上に上がるほど多くなっており、キャリアを重視する傾向が見られる。

また、これを75才以上に限定した場合には37人中23人(62%)が「いる」と回答しており(図なし)、その場合の相談相手は30代後半以降に限られている。それはおそらく自身の子息がその世代であることと関係が深いと思われる。

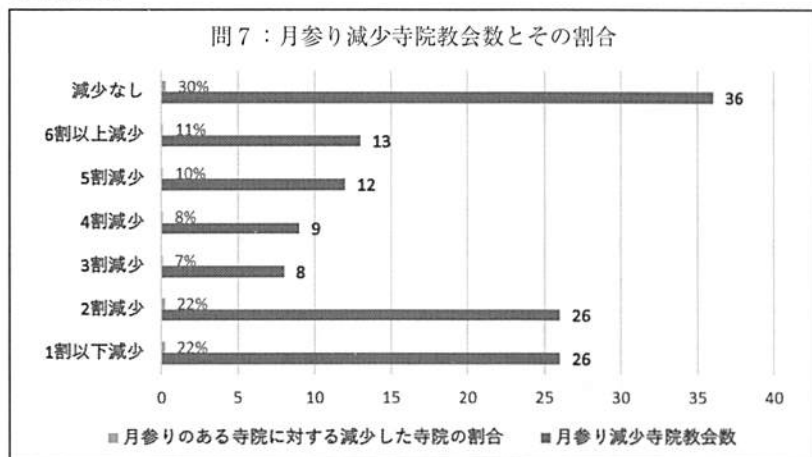
### §3. 寺院運営上の変化(問6～問12)

〔問6〕新型コロナウイルス感染拡大当時、寺院運営はどのような状況になりましたか。(複数回答)



この質問からは、檀信徒の行動変化を伺うことが出来る。その行動変化はコロナへの警戒心から檀家自らが選択したものと、寺院側からの提案でそのようになっている場合が考えられる。これは感染当初の情報の少ない中、いわばパニック状態の中での行動変化である。またこの中の「寄付が集めにくくなった」という選択肢は、檀家の経済状況の悪化がどの程度影響しているかを計ることを目的としている。

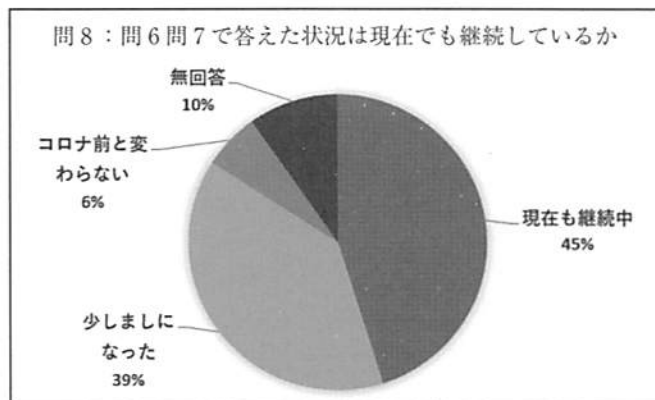
〔問7〕「月参りが減った」と答えた方に。感染最盛期にどのくらい減少しましたか。



これは毎月の命日に檀家宅に出向いて読経する、いわゆる「月参り」「月回向」についての質問である（※この「月参り」という表現が回答者に理解されない場合があった）。

グラフによれば、月参りのある寺院の内、そのおよそ2割が半分以上減少したと回答している。そしてその状況が継続しているかを問うのが次の〔問8〕である。

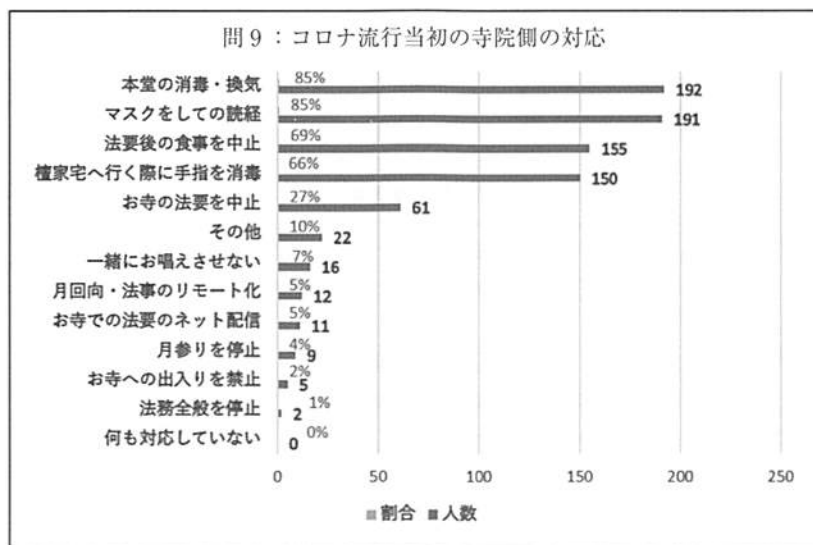
〔問8〕問6・問7でお答えになった状況は現在でも続いていますか。



ここでは45%もの寺院が、感染拡大当初の問題を継続して抱えていたことが示されている。

第6波以降、政府が行動規制をとりやめるなど緩和的な措置をとってきたこともあり、「少しましになった」という回答が39%あった。しかし依然として、約半数の寺院が感染拡大当初の状況から抜け出せていないという状況であったことが窺える。

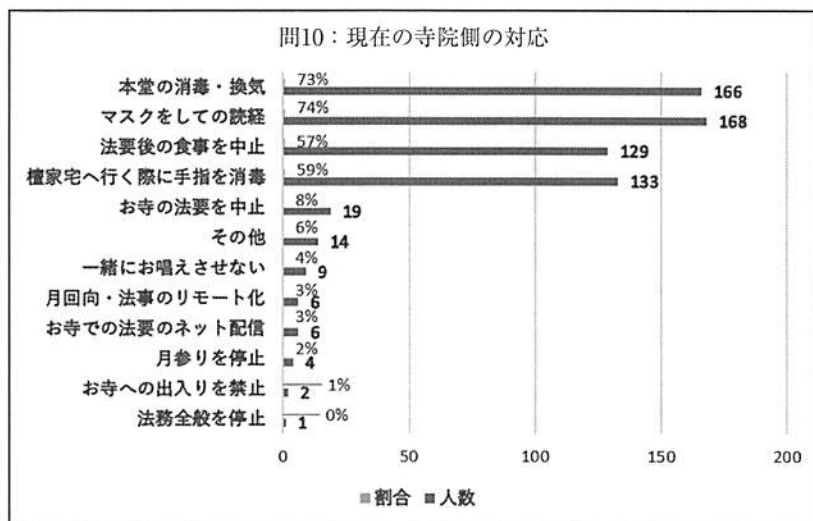
〔問9〕新型コロナの当初、寺院側としてどのような対応をされましたか。(複数回答可)



問9は感染拡大当初にとった寺院側の対応を問うものである。選択肢としては、新型コロナの感染からいかに檀信徒および寺族の身を守るか、といういわばネガティブな対応をあえて挙げている。

一方「その他」としては、「法要の時間をずらして複数回奉修するした」「寺族と総代のみで法要を行った」「檀信徒は本堂前で焼香した」「拍子木を奨励した」などが見られた。これらは、時間的にも空間的にも檀信徒を分散させて法要を奉修したという報告であり、たとえコロナであっても、なんとか知恵を絞って法要をつとめたというポジティブな対応であった。

〔問10〕 その対応は現在も継続していますか。

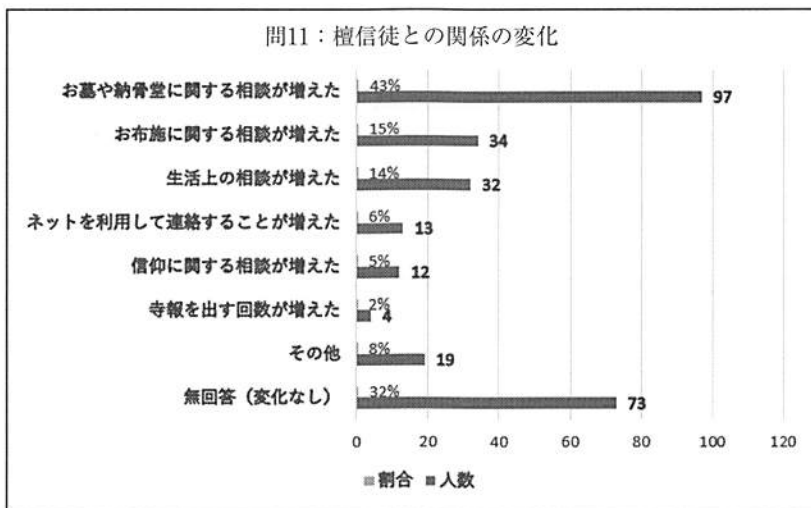


そのような寺院側の対応を現在も継続しているかを問う質問が問10である。この質問に対して全体の56%にあたる126件が「すべて継続している」と回答している。

内容を見てみると、依然として「本堂の消毒・換気」「マスクをしてお読経」「手指の消毒」といった感染症対策は継続しつつ、「法要後の食事」はやや復活しつつあり、法要を中止していたところも再開しているところが増加している。しかし個別に見れば、未だに法要を再開できないでいる寺院も19件確認できるのであり、新型コロナの長期化の中で、なかなか元の状態に戻れなかった現実もうかがえる。

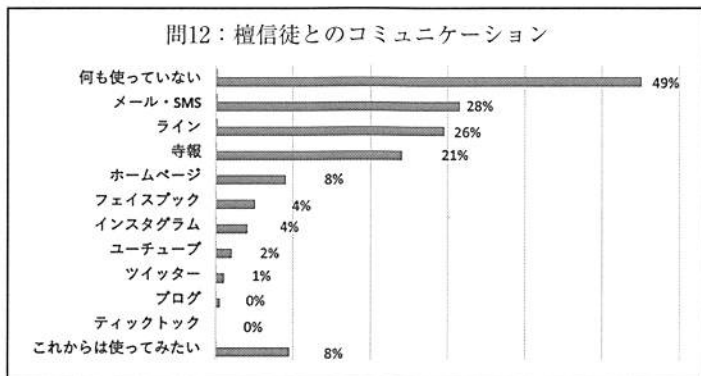
〔問11〕 檀家さんとの関係でどのような変化がありましたか。(複数回答可)

この質問の回答として圧倒的に多かったのが「お墓や納骨堂に関する相談が増えた」であった。またその他の欄には「墓じまい」「永代供養」の相談が増えたという報告も多く寄せられている。もちろん多くの方が〔問15〕の自由記入欄で指摘されているように、この問題は新型コロナ以前から存在し深刻になっている問題ではある。ただ一方で、そのスピードが新型コロナによって加速している感があるという指摘もあった。



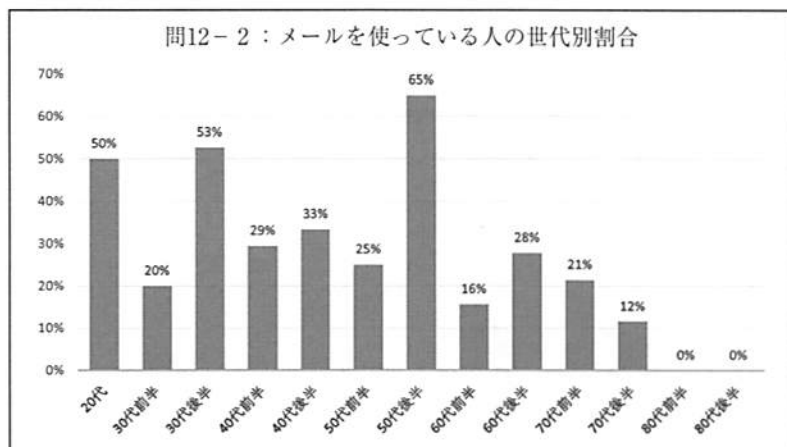
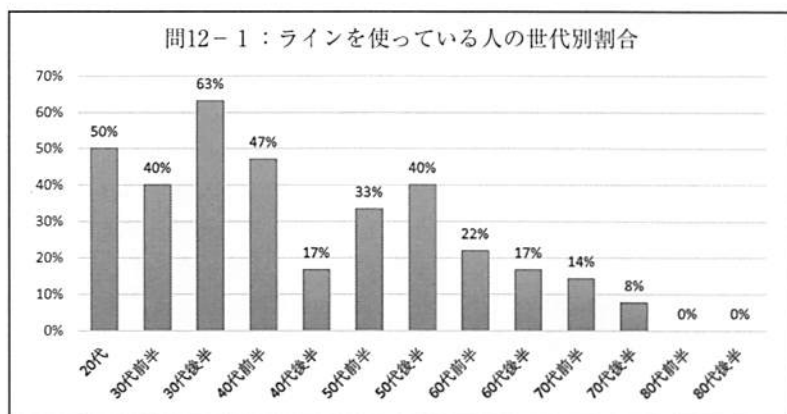
ネット利用の増加は限定的であった。一方自由記入欄には「電話・手紙」というオールドメディアの記入も多く、中には「孤独を感じている高齢の檀家さんに電話や手紙を出す回数が増えた」という報告も見られた。ネット利用は高齢者にはハードルが高く、むしろ電話や手紙といった方法が有効であり、かつ人間的な心のつながりを保障する方法であるとも言えるだろう。

〔問12〕 檀家さんとのやりとりで、下のいずれかを利用していますか。（複数回答可）



この質問は主に「ネット利用」の実態調査と、「寺報」（お寺独自の新聞的なもの）を利用している数の調査を兼ねている。ただし、これも〔問12〕と同様、自由記入欄に「電話や手紙」という回答が見られた。また約半数が「何も使っていない」と回答している。

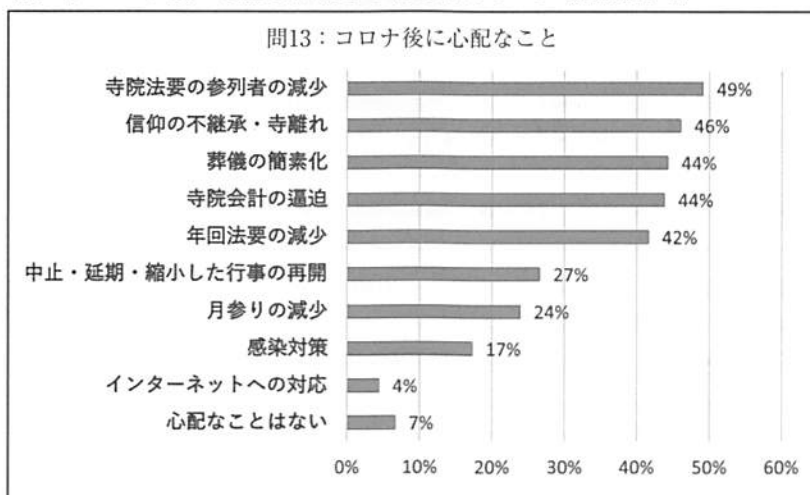
この調査から明らかなのは、檀信徒との連絡に用いるネット利用としては、メールやSMS（ショートメッセージ）とラインが使いやすいということであろう。ホームページやインスタグラム、ツイッターなどは寺院の情報発信には有効であるが、個別の檀信徒との連絡という意味ではメールやラインが未だ有効であるといえる。



また、調査結果はラインが30代後半に多く用いられているのに対して、メールが50代後半に多く用いられている傾向があることをよく示している。おそらく今後、住職や檀信徒の世代交代が起こればこれもまた変化していくのであろう。

#### § 4. ポストコロナに向けて（問13～問14）

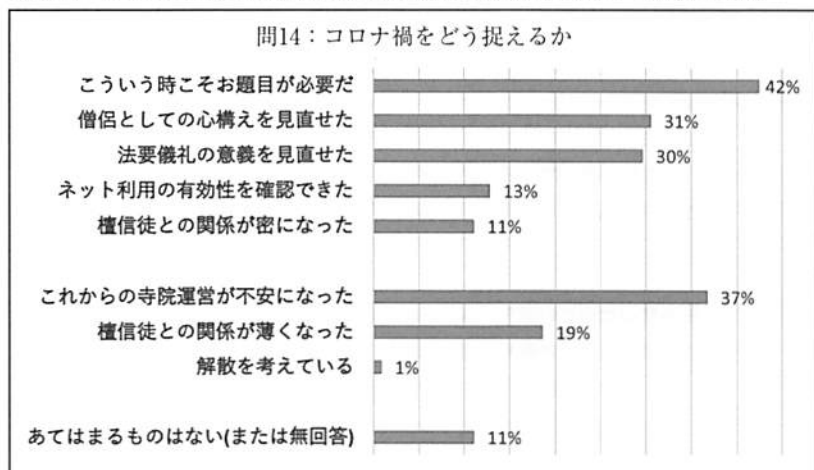
〔問13〕 コロナ後に心配な事柄をお答えください。（複数回答可）



コロナ後の心配事についての質問であるが、前述のように、これらの問題は今に始まったことではない。しかしながらコロナによって加速していることが考えられ、早急な対策が必要であらう。

また「心配なことはない」という回答もあり、その多くは〔問11〕檀信徒との関係の変化でも〔問12〕檀信徒とのコミュニケーションでも、無回答であった場合が多い傾向にあった。ただしそれは消極的な反応ではなく、むしろ「自粛は間違い。お祖師様がおられたら答えは自ずと出る」（問15の回答例）という強い信仰に基づく積極的な反応であったと捉えたい。

【問14】 今回のコロナ感染拡大をどのように捉えますか。(複数回答可)



このグラフは上下に分かれている。上の5つはポジティブ、下の3つはネガティブな心境を表している。

「こういう時こそお題目が必要だ」が42%であったのは少ないと感じるが、その理由としては、「普段から感じていることなのでコロナで特別そうなのではないから選ばなかった」ということもあると推測したい。

ここで「お題目」に次いで多かったのは「これからの寺院経営が不安になった」である。中には「解散を考えている」もごく少数ではあるが存在し、事態は深刻であると言わざるを得ない。ただそのような中でも、「コロナを良い機会に」という声もあり、逆境をむしろ信仰の契機と捉える姿勢がこのグラフからも伺うことが出来る。

### 3. まとめ

【問15】 最後に、ご意見や感想などございましたらこちらにご記入下さい。(任意)

この質問は、アンケートで答えきれなかったそれぞれの僧侶としての思いを自由に書いていただくという狙いがあった。そのため様々な意見が寄せられたが、「法華者として」の意見を集約するというのも忘れてはならないことである。

今回寄せられた意見の一つひとつについて紹介することは割愛するが、

全体の傾向としては、今後の寺院運営に不安を抱きつつも、題目の信仰を通じてより一層の努力、また制度的な改革の必要性を訴える意見が多く見られた。

コロナ禍発生より4年半が経過した。人流はコロナ前に回復し、経済も回り始めた。しかし、その間に、ウクライナやパレスチナでは戦争が勃発し、国際情勢は混沌の中にある。国内においても、能登半島地震が発生し多くの人が今なお不安定な生活を余儀なくされている。また新たな未知のウイルスによる世界的な感染拡大の発生も危惧される。

このような「ポストコロナ」の現在において寺院がいかにあるべきか。今回のアンケート結果がその問いに答えるための一助となれば幸いである。

#### 注

- (1) なお、討議会での発表については「第59回（令和4年度）法華宗教学研究所総会討議会資料コロナ禍における寺院」（2023年10月）として冊子にまとめられ、法華宗（本門流）宗務院より宗内各寺院教会に配布されている。